Second Column
2025.9

＼こちらからもご覧いただけます／

HP　公式LINE

Dr.わーだーの養生記

vol.77
「足のむくみ」

心血医院（ここちいいん）　院長 和田（わだ） 豊郁（とよふみ）

じっと腰かけていると足がむくみます。むくみを指で圧迫しまくったり、ふくらはぎの下にものを敷いて足を高くして寝たりすると翌朝足がパンパンに腫れあがりますからやってはいけません。毛細血管の前後では水が出入りしていますから静脈やリンパの流れを悪くするとむくみます。リンパ管は簡単に壊れるので圧迫してはいけません。ふくらはぎの下にものを敷くとそこで静脈が止まってしまってむくみます。手や足を下げていても静脈血やリンパ液が心臓に戻るのは弁があるからです。腕や脚の付け根までは自動的に上がってきます。脚の付け根から心臓までは体を起こしていると水圧がかかりますから腰かけてじっとしていると足はむくみます。ふくらはぎの筋肉を動かすと筋肉の間にある静脈が圧迫されて心臓まで血液が跳び上がります。ふくらはぎを動かさないと第二の心臓にはなりません。体育座りのように膝が心臓よりも上にあればサイホンの原理で脚の血液は腕と同じく心臓に吸い込まれて行きます。

■ 心血医院（ここちいいん）
久留米市日吉町14-68／TEL.0942-65-5129
診療時間:〈月～土〉 9:00～12:00
〈月火・木金〉19:00～22:00
休診日:日祝・盆・年末年始

鼈甲（べっこう）って何？

EcoRing 店長 馬場 真二

鼈甲（べっこう）は南方の海域やカリブ海、インド洋の海域に生息しているウミガメの一種でタイマイの甲羅・緑甲（爪甲）・腹甲を、巧みに加工・細工した製品です。タイマイは赤道近くの暖かい海に生息し、大きいものは甲羅の長さが1メートル、体重が100kgまで成長します。また背中の甲羅は必ず13枚で、黒くなっている部分とアメ色になっている部分が混在し、まだら模様（いわゆるべっこう甲柄）を形成しますが、アメ色の部分が多いほど珍重され、並茨布（バラフ）、中布、上布、特上布と色味によって呼び名が分類されます。
また、アメ色だけで形成されている製品は腹甲を使用し、自甲と呼ばれ、さらに貴重になります。鼈甲の歴史は古く、奈良時代には既に正倉院に収蔵されていた記録があり、江戸時代には長崎を中心に発展し、眼鏡や櫛、簪などの装飾品として広く用いられました。近年、鼈甲ブームが再燃していますが、人気の理由としては、主に希少性と加工の難しさ、そして高い需要にあります。鼈甲は、ウミガメの一種であるタイマイの甲羅から作られるのですが、過去に乱獲されて個体数が減少したり、ワシントン条約によって国際取引が禁止されているため、材料が非常に貴重です。
また、製品を作るには熟練した職人の手作業で加工されるため、高い技術力と手間がかかることも価格を押し上げる要因となっています。さらに、その独特の美しさや耐久性、肌馴染みの良さなどから、眼鏡や装飾品として高い需要があり、これらの要因が重なり、鼈甲製品は高価になっています。伝統工芸品としても価値が認められてきており、今後も需要は高くなっていきそうです。もし、もう使わなくなったな...と思われる製品があれば是非エコリング久留米店にお持ちください！！大切なお品を新たな価値へと繋げるお手伝いをさせていただきます。

SECND読者限定
9月の買取キャンペーン
鼈甲メガネ／1点2,000円
鼈甲簪、櫛、帯留め／1点300円
※ご予約、受付の際に「セカンドを見た」とお伝えください

EcoRing（エコリング）久留米店
久留米市日吉町19-2 オーシャン日吉Ⅱ1階
TEL.0942-48-0760
営:11:00～18:30／休:水曜

神主四方山話 vol.26

久留米宗社 日吉神社 禰宜 久富 貴文

久留米宗社 日吉神社 社務所
久留米市日吉町106／TEL.0942-32-3770
営:9:00～17:00 kurume_sousya

かつて境内の御神木にはフクロウが棲んでいました。宮司である父が手笛で鳴き方をマネすると、フクロウが返事をしてくれていました。子供の時に私も手笛をやってみましたが、父のように上手な音がだせないのかフクロウは返事をしてくれませんでした。今では神社で見かけなくなった珍しい虫もいました。月読宮の横の木には縦長で光沢のある緑色のタマムシがいました。よく綺麗な羽が落ちていたので拾っていたのを覚えています。それから冬になると木にくっついて冬眠しているミノムシ。街中では見かけないタヌキ、たぶん暖かい排水溝にいたんだと思います。タヌキが父を気にいっていたのか、たまに父の元に顔を見せにきていました。珍しいところで家庭やお店から逃亡してきたであろうカブトムシやサワガニ。環境や気候の影響もあってか、以上の生き物は境内で姿を見なくなりました。変わらず姿を見せてくれるのはカラスや猫、それから蝶類。蝶は小さいものから大きな黒アゲハまでたまに見かけます。今年も境内の蝉たちは元気でした。とある11月の暑い日、蝉が地中から出てきて鳴いていたこともありました。
◎神主さんたちから聞いた神道奇談◎
拝殿から人が凄い勢いで飛び出してきた。勾配が急な長い階段を駆け下りるというより、ポーン・ポーン・ポーンと飛び降りていった。鳥居から出たところでぐったりと倒れこんだ。まるで狐のようだった。
では皆様日々お健やかにおすごしくださいませ。

近頃の出来事

vol.42
「麦わら帽子の効力」

上海酒家 店長 廣田 麻美

広報部長
太郎くん

昭和の夏休みは、麦わら帽子と虫取り網が正装やった。朝いちばんで友だちん家に集合し、「ラジオ体操カードにハンコば押した?」が秘密の合言葉。川べりば走り回れば、セミは大合唱、ウチらは三分で沈没。捕まえたのはチョウ一匹と、熱中症寸前の自分だけ。
昼は家に避難し、氷ガラガラの麦茶をがぶ飲み。「外は危険地帯やけん、午睡を命ず」と母ちゃんから布告。扇風機の前で「あ～」と声を伸ばすのは、国民的義務じゃった。
夕方は縁側でスイカの種飛ばし選手権。飛距離よりも「誰の口に命中するか」が見どころ。勝者は塩をひとつまみ多くもらえるという、世界最安のインセンティブ。
夜は盆踊り。太鼓が鳴れば、足はつるちゃけど笑顔だけは死守。帰り道に蚊取り線香の匂いがまとわりつき、「ああ、今日は生還できた」と胸をなで下ろす。
今どきは冷房も氷もボタン一つ。便利になったばってん、あの「汗だくサバイバル合宿」は姿を消した。けど麦わら帽子ばかぶると、なぜか心がドーピング。あれは昭和仕込みの魔法――いや、正直いえば防御力＋3、かぶった瞬間だけラスボスにも勝てる気がする伝説装備やったとよ。

中国料理 上海酒家
久留米市六ツ門町2-16 第5泉屋ビル6F
TEL.0942-39-8139
営:11:30～14:30、17:00～21:00
休:水曜
shanhaishuka

社叢（しゃそう）から

〔第2話〕
社叢の話

大堰神社 禰宜
宮崎 毅

皆さんの神社に抱くイメージは、こんもりと木々が生い茂った奥に神殿が鎮座している、というものではないでしょうか。本コラムのタイトルにいう「社叢」は、神社の境内を囲う森のこと。神社で森と神殿は一体として、人々に大切に守られてきました。
しかし、原初の森とは人を寄せ付けぬ「神の世界」。昼なお暗い奈良・春日山の原生林では今も「異界」の空気を感じ取ることができます。
次第に人は森よりも神様の依代としての樹（巨木）に、そして神様のお住いとして建てた社（屋代）に頭を垂れるようになっていきます。さらに、神殿造替の木材を伐り出す「御杣山（みそまやま）」のように、元々の森では足りず社殿のため新たに森を造る=植林が行われるようになっていきました。森の禁忌は薄れ、神殿の修復、神饌の材料などを目的に植樹が行われました。
神殿の維持と森の保全はある意味二律背反。それでも社叢は神社に必要なものとして、人の手を加えつつ保たれてきたのです。
実際は、立地その他の事情により“森”とは呼べない神社も少なくありません（かく言う大堰神社も然り）。原初のDNAに従って、私たちはいかにまばらであっても、社叢の木々を畏れ、守り、後の世に受け継いでいきます。

大堰神社（オオゼキ）
福岡県三井郡大刀洗町冨多1302
アクセス:西鉄甘木線大堰駅より徒歩5分

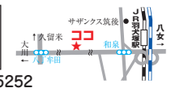
大堰神社
御鎮座百年
記念大祭
令和7年
11.29(土)

家具屋の思い出話（47）

「旭川出張～東京から旭川～」

Cozy Flat オーナー 仲 洋史

cozyflat5252



Cozy Flat
筑後市四ヶ所菅原田460-1
TEL.0942-52-3480
営:10:00～18:30
休:水曜、第2・4木曜

旭川に8時半に着きたいから、羽田の出発は7時の便になると言われ、東京に前泊した話の続きになるが、どこででも顔が広く、頼れる東京の友人が作ってくれたスケジュールは驚くほどタイトだった。東京旭川2泊3日の旅。7時出発ということで、とりあえず羽田で6時に合流した。10時に家具の大手メーカーに到着し、そこであらかじめエントリーしていたファクトリーツアー（製造工場見学）10時半より11時半の部に参加し、それから12時まで展示場を見て回り昼食。その後13時から14時。14時半から17時展示場の各社ブース参照など目まぐるしかった。夜の食事処まで決まっているし、既に予約もしてあった。2日目も同様に8時半からスケジューリングされていた。よほど8時半スタートが好きなのかと思った。3日目は、午後の帰り便前まで自由計画と書いてあるが、フリータイムというわけではなく、列記されているメーカーや観光先のどれかを選ぶという自由であった。初日の昼は当然旭川でうまいとされている味噌ラーメンに立ち寄った。涼しいはずの旭川のこの日は気温34度。九州よりも暑い。そこにラーメンの辛さも相まって、ラーメン丼に入浴中くらいの汗が吹き出る始末。食べ終わり外に出るとなんと涼しい風がと思っていたが、何せ外気温34度まるでサウナだった。タイトなスケジュールの中にも、彼は顔の広さと心の優しさを充分発揮していた。旭川を回るために予約していたレンタカー屋に、訪れる各メーカーに配るというお土産を東京からたくさん送り込んでいた。この気遣いが人を虜にし、会う人会う人が優しく、彼に紹介されて初めて挨拶する私にまで優しく接してくれた。そういえば彼は旭川をもう何度も訪問し、最初のファクトリーツアーも経験済みのはずなのに、私に見せるべく一緒に歩いてくれた。工場見学など失礼ながら何度見ても変わり映えはしないはずなのに、そんな事はおくびにも出さず、暑さの中ひょうひょうと、時に初めて聞くように説明する工場の人の言葉に頷いていた。自分の言葉が伝わったと思ったのだろう。説明してくれていた工場の人は少し自分の仕事に誇りを持っている風情で彼を見上げていた。語弊があると思うが、旭川のメーカーはどこよりも家具造りに真摯に向き合っていると思う。良い家具を作りたいという姿が見えるのである。良い家具とは何か?「安いが善」と言わんばかりのすぐにこわれそうな作りの粗い椅子や箱ではなく、緻密で使いやすく飽きが来ず、手触りがすごく良い家具ではなかろうか。但し価格は少し高くなる。北海道には水楢や樺の木はまだまだあるのだが伐採されている木の95%はチップにされ燃料にされていると言う。樹齢数十年の水楢もお構いなしにチップにされている。そんな木々をもっと活かしたい。もっと良いものを作って日本に届けたい。その言葉に嘘はなく、皆が真剣にそう言っていた。横で聞いていた東京の彼はこの言葉を僕に聞かせるために旭川に連れて行ってくれたんじゃないかと今思っている。